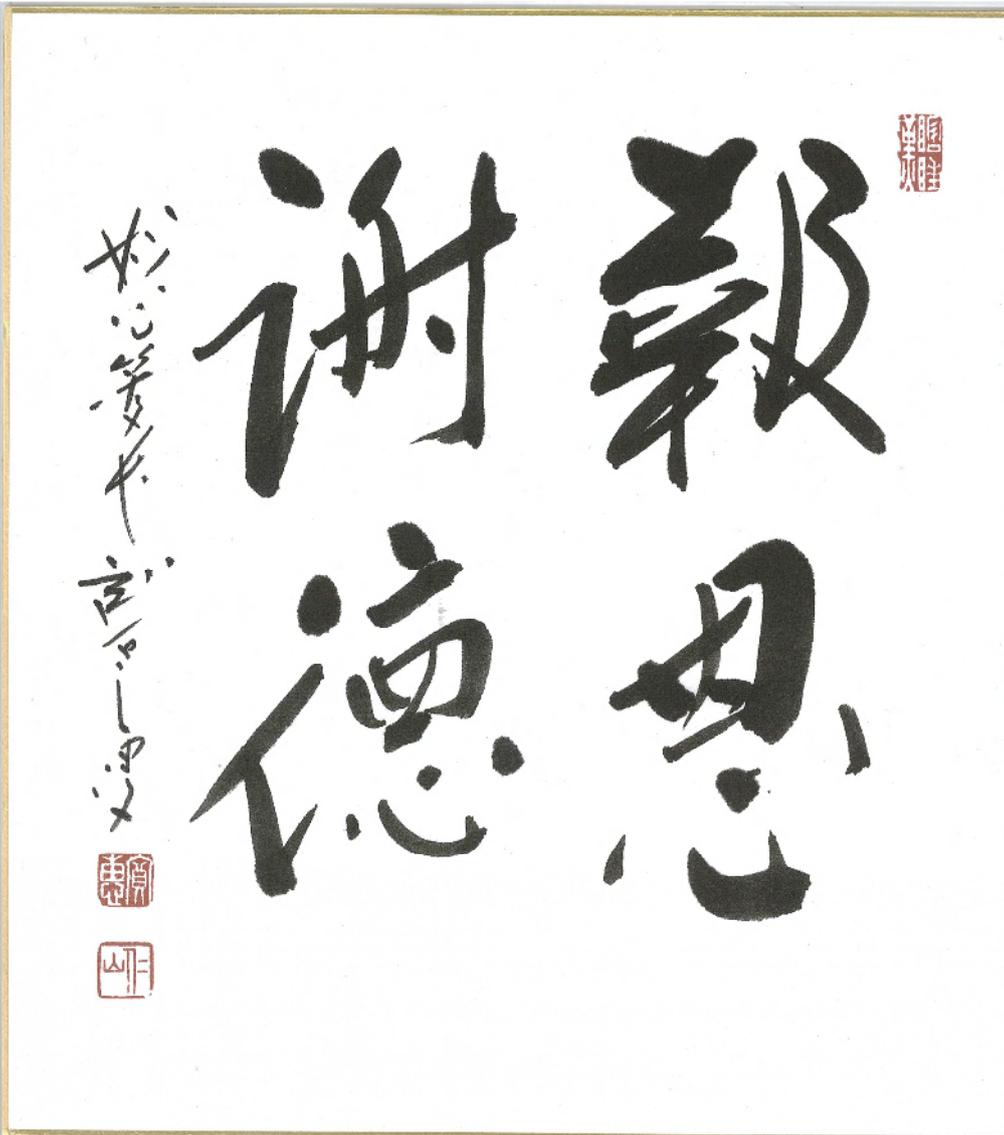


圓福寺報

圓福寺報 第八十号
 令和四年一月一日発行
 発行者 臨濟宗妙心寺派 圓福寺
 千葉市稲毛区穴川町三七五 TEL (二五二) 九一八一
 ホームページ chiba-empukuji.com
 E-mail: oshou@chiba-empukuji.com



「『報恩謝徳』 妙心管長 臥雲叟□□」
 臥雲庵 松山 寛恵老大師 ご染筆

令和四年 元旦

圓福寺寺庭 宮田尚美 葬儀・告別式	目次	頁
尚美さんのお寺ライフ その一		6
尚美さんのお寺ライフ その二		10
尚美さんのお寺ライフ その三		13
「タイムトラベル」 千城台南中二年 川口 育海		15
木曜坐禅会案内		17
「僧堂で何してる？」その十一 ——修行道場の生活		18
令和三年下半期 お寺と和尚の日録抄		20
令和四年年間行事予定 心のこもったご法事をおつとめする四条件		16
園だよりから 「アリとギリギリッス」		22
令和四年年忌表		17
写経会・日曜会		18

圓福寺山内忌中につき、

新年のご挨拶を、ご遠慮申し上げます。

去る十一月二十六日、圓福寺寺庭、妻尚美が急性骨髄性白血病にて六十四歳で息を引き取りました。檀信徒の皆様のご協力で再建なった伽藍の茶室を活かすことも、茶道も道半ばで、少々生き急いだ感もあります。二人の孫にも恵まれ、人として一通りのことを送らせていただいて人生の幕を閉じました。

旧年中に賜りましたご厚情を深謝致しますと共に、本年も変わらぬご交誼のほどお願い申し上げます。

圓 福 寺 合 掌
喪主 宮田 宗格

圓福寺寺庭 宮田尚美葬儀・告別式

圓福寺寺庭、宮田尚美の通夜並びに葬儀告別式を十一月二十九日(月)三十日(火)の両日、本堂にて執り行いました。

コロナ禍でもあり、和尚様方もごく近い方々のみのご参列で、檀信徒の方へのお知らせも控えてという形を取らせていただきました。しかしながら、穴川花園幼稚園の関係はお知らせしないわけにもいかず、在園児・卒園児やその保護者の方々に、幼稚園から連絡をさせていただきました。

式の導師を圓福寺の本寺である香取市の樹林寺閑栖和尚様にお勤めいただき、和尚様方十名はじめ、遺族・親族、そして北海道、南は九州からという遠方からもご会葬に駆けつけてくださる方もおいでになり、約三百余名の方々のお焼香をいただき荘厳裡に故人を見送ることができました。ここに、お知らせ申し上げます。

お通夜にて授戒のお参りをして、戒名はきとくいんわけそうしやうだいに喜徳院和氣宗尚大姉でございます。和氣は故人の好きだった禅語からいただき、宗尚は裏千家のお茶名から引かせていただきました。



追悼

圓福寺寺庭婦人 宮田尚美

本号は、寺庭婦人宮田尚美の逝去に伴い、僭越ながらお寺での足跡を振り返る追悼号とさせていただきます。

まずは、聞きなれない寺庭婦人、略して寺庭という言葉ですが、一言で言えば住職の奥さんのことをいいます。家庭に対して寺庭ということはいえば、単に住職の妻ではなく、お寺を守っていく役割を担うということになります。

その呼び方には、「大黒さん」とか「お庫裡さん」とかもあります。現代では寺庭婦人と言われています。

江戸時代までは僧侶の妻帯は許されていませんでしたので、寺庭婦人の歴史はそう古いものではなく、その地位や役割は確固たるものが確立さ

れておらず、宗派や各寺院によつてさまざまのようです。

圓福寺寺庭の尚美さんも、床の間に飾っておくと言われて嫁いだのに、お寺の留守番や和尚さん方の接待、行事の際の料理作り、茶禅会の講師、四国あるき遍路にも駆け出され、果ては市原別院での草刈りやトラクターに乗っての畑の耕運など、話が違ふと思つていたことでしょう。

それでも、お寺に嫁いだからこそその貴重な体験や、何人もの老師や和尚さん方とのご縁もいただくことができました。ご縁をいただいた老師の墨跡をちりばめながら、写真とともに振り返って、故人をしのんでいただければ幸いです。



第三十三代妙心寺派管長
又玄窟河野太通老師ご染筆
「〇（円相） 主人公」
平成二十七年の火災後に、寺庭尚美さんがお見舞いにいただいた墨跡の一幅

幼稚園の

「お茶のおけいこ」で

おてまえ
お点前を披露

六川花園幼稚園の年中児、年長児を対象に、月一程度茶道の指導を行って来ました。年長児の最後には、卒園茶会を催し、子どもたちが保護者にお茶を点てるほどまでに成長しました。



京都 圓福僧堂 政道徳門老師ご染筆
「日々是好日」
長男が修行している圓福僧堂の老大師から、病氣見舞いにいただいた墨跡の一幅



圓福寺報第27号（平成11年7月発行）に掲載された、寺庭尚美さんの記事と文をご紹介します。

尚美さんのお寺ライフ

「尚美さん」？ だれであろう、住職の妻であります。

本山から出された本に、「寺庭婦人とは、一般の家庭婦人に対して、寺院の家庭にある婦人のこと」とあります。ですから、「尚美さん」は寺庭婦人です。

寺庭婦人の歴史はそう古くはありません。明治五年の太政官布告に、

「僧侶の肉食妻帯畜鬚勝手たるべき件、自今僧侶肉食妻帯畜鬚等可為勝手事。但法用の外は人民一般の服を着用不苦候事」とあり、この時初めて寺庭婦人は公的に認められました。

新瀧生まれ。冷凍冷蔵機器を製造する町工場の長女。東京の某体育大学卒業。現在、夫一人、一男二女の母。



ある宗派の「寺庭婦人の心得」には、「寺と檀信徒との紐帯は、ひとえに寺庭婦人にあります」というように、その役割は非常に大切といわれます。

まだまだ、子育ての真っ最中ではありませんが、そろそろお出ましを願い、お寺ライフで感じたことなどをつづつてもらいます。

第一回目は、何といきなりビッグなタイトル「ドイツ紀行」となりました。

住職が参加する予定だった、臨済宗青年僧の会の研修旅行。代わりの役が回ってきて、思いもかけず遠い外国へはじめていくことが出来ました。

ドイツのデュッセルドルフに、仏教伝道協会が建てた「恵光センター」という日本文化の紹介と国際交流、そして仏教伝道を目的とした拠点があります。平成五年秋に釈迦堂が完成し、それを機に坐禅会が開催されるようになりました。この坐禅会の指導を、臨済宗青年僧の会がお手伝いしています。その恵光センターの見学と、地元の人との交流・坐禅会を目的とする研修旅行が、方広寺派管長親下を名誉団長として計画され、事務局員の住職も参加する予定だったのでした。

時差初体験

処女航海の私にとって十一時間のフライトは、殊のほか長く感じられました。おまけに、「時差」というものも、とくと体験させてもらいました。

関西空港を午前十一時半に離陸

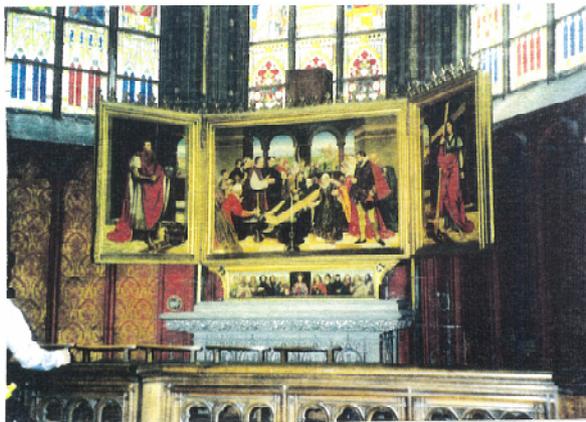




し、十一時間も過ぎているのに、スキポール空港（オランダ）に着いたときはまだ午後二時半。お日様がコーコーと照っていました。デュッセルドルフ行きまで五時間ほど待ち時間。出発の時刻は夜の七時半なのに、緯度の関係で外はまだ昼。なんとなんと昼の長い一日なのでしよう。そのおかげで、私は関西空港から何食の昼食やら軽食やらを食べたのでしようか。

ようやくの思いでデュッセルドルフのホテルに着き、やれやれこれで休めると思った私の目の前に、なんと食事の用意が・・・。さすがの私も食べきれず、心？いえいえおなかの底から「もったいない」思いをさせられました。

そして、こんなに起きていたのはお寺の年越し参り以来だとか、フォアグラを採られるアヒルの気分だなどと、私にとっての時差体験は、「眠気」と「もったいない」の二語に尽きるものでした。



ノイトルダム大聖堂「キリストの復活」

感動の連続

それでも、アムステルダムスキポール空港から乗り継いで、デュッセルドルフ行きの機内から見下ろしたアムステルダムの風景が感動の幕開けとなりました。

目が覚めるような緑のじゅうたんの中を流れる中小の川は、大地に亀裂を入れたようです。その中に、とがった屋根の家が点在し、まさに緑と水の中に生活しているという風景です。

最初の？夜は、現地時間の午前三時から目が覚めてしまいました。朝までの時間、外の景色を見ると、向かいの建物は「ポルシェ」のオフィスで、緑が豊かな気持ちの良い街です。明るくなり始めた頃からきれいな鳥の声が聞こえるのですが、稲毛区役所のスピーカーから聞こえるカッコウの声に慣らされている私には、生の本物の鳥だと認識するには時間がかかりました。

大聖堂と般若心経

アウトバーンで向かったケルンの大聖堂では、般若心経による礼拝。総勢の十七名の和尚さんたちの読経と鉦の響きが、重厚な壁をはい上がり、見上げるほどの天井まで届きます。堂内ケルン大聖堂前にての観光客



は、遠巻きにそして怪訝そうな様子でこちらを見ていました。その大聖堂には、ただただ圧倒されました。空高く積み上げられた石の壁は、ドイツ最大のゴシック様式の建造物で、

高さが一五七メートル、六〇〇年の歳月をかけた一八八〇年に完成したのだそうです。堂内は、鮮やかな色彩のステンドグラスから光が射し込み、壁面や柱に浮き彫りにされた多くの聖人たちを照らします。そして、天井まで届きそうなパイプオルガンのパイプ。聞き慣れた般若心経よりは、その音色を少しでも聴かせて欲しいと失礼なことを思った私でした。

それにしても、この建物は光と音を巧みに使った見事な宗教施設だという印象を受けました。
(以下、次号につづく。)

15



埼玉 平林僧堂 放牛窟系原圓應老師「染筆
「和氣満堂」

住職が修行した平林寺の圓應老師には、仏前結婚式の戒師をしていただきました。それ以来、尚美さんはかわいがっていただきました。戒名の「和氣」の由縁です。

四国あるき遍路の旅姿

子育て中や子どもの受験期などは、参加できませんでしたが、最近はよく参加していました。
しかしながら、日ごろの運動不足や若い頃の古傷がたたり、いつもどん尻を歩いて、皆さんの足を引っ張る係でした。



圓福寺報第28号（平成12年1月発行）に掲載された、寺庭尚美さんの記事と文をご紹介します。

尚美さんのお寺ライフ

尚美さんのドイツ紀行

（前号のつづき）



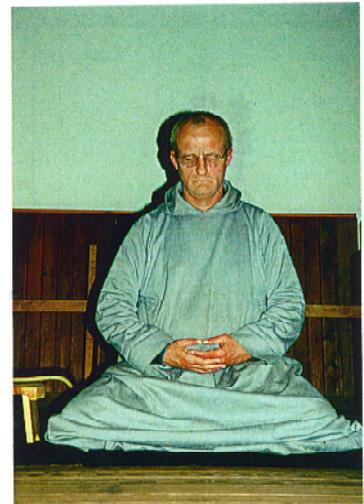
四日目に訪れたズンダルトの修道院では、とてつもなく広大な敷地での修道生活を垣間見させていただきました。

修道士たちは、灰色のフードつきマントのよ
うなものを身につけ・・・きつとこれが「作務
着」と同じなのでしょう？ いえいえ、あんなに丈が長くては動きにくいのではないかなど
と考えたりしました。

僧堂と同じように自給自足を掲げる修道院に
は、まるまると太った黒豚やアヒル
や羊が、広い緑の中でのんびりと飼
育されておりました。建物の見学の
あと、茶礼で出された甘くおい菓子



とTeaは、修道士さんのおだやかな表情と木漏れ日と相まって、ここをとでも静かに和ませてくれました。



宗教と日本を感じて

ケルンの大聖堂はじめ、いくつかのキリスト教の教会を見学し、また、ズンダルトの修道院での交流に参加させていただきました。臨済宗のお寺の人間として考えてみると、宗教が違い、方法は皆それぞれ違っていても、求めているものは「真理」なんだと感じさせられました。

それは、ドイツ、アムステルダムと旅行中に私たちを照らしてくれましたお日様。そして、十一時間後、関西空港から新大阪までの電車



「はるか」に乗った時、昨日までの石の街並みの外国ではない、「あー、帰ってきたんだ。大阪の街並みだ」と思った時に輝いていたお日様。そのお日様は、旅行中のお日様と同じものではありませんか。私たちが求めているものはそれなのだと気づかされました。

また、この旅を通して、日本・日本人ということについても、あらためて考えることができました。

デュッセルドルフで通った道は、すべて石を使った道でした。その道には、自動販売機やコンビニなどは一切ありません。そのかわり、古

き良きものを大切に育むところとゆったりとした時間があります。

戦後の日本は、復興の名の下、近代化・便利さ・合理性のみを重視して発展しました。その結果、不便でも大切である過程を排除してきたがゆえに、趣き・風情・ころ・伝統などということが、いまや死に瀕しているのではないかと感じました。

日々育児に追われる生活をしている私にとつて、見失いがちなものを見つめ直す刺激と感動を与えていただき、ご一緒させていただいたごみなさんにこそ感謝したいと思います。





幼稚園の子どもたちが来た時や収穫祭には、味噌汁や芋の子汁を作ったりしていました。また、時にはトラクターにも乗って、畑作業をしていました。

市原別院で活躍する姿



畑仕事の合間に、休憩中！



おみそ汁できたわよーっ！



幼稚園職員旅行での一コマ！【北海道にて】



なにやら、畑の作業中！

圓福寺報第32号（平成13年1月発行）に掲載された、寺庭尚美さんの記事と文をご紹介します。

尚美さんのお寺ライフ



尚美さんは、実家のおばあさんに留守を頼んで、修学旅行でも行ったことがないという京都へ初めての本山まいり。さて、どんな顛末になるやら・・・。

九月十五日〜十七日の二泊三

日、京都へ行ってまいりました。圓福寺の花園会青壮年部の本山研修にくっついていったのです。

圓福寺に入寺し、寺庭（住職の妻）として十三年が過ぎましたが、ナント！初めて本山妙心寺に行きました。お寺の人間として、本山に行ったことがないというのは、本来ちよつと恥ずかしいことなのかもしれません。夫である住職は、本山によく行っているの、「そのうち、私も行ってみたい。」位にずっと思っていました。今回やっと実現しました。

まず、住職がよく口にしていた「ハナカン」に

京都 花園会館

Hanazono Kaikan



行きました。「ハナカン」とは、妙心寺の中にある「花園会館」（略して「花館」）のことで、妙心寺の宿坊で、各種会議・研修もするようです。花園会員であれば利用も優待され、圓福寺の檀信徒の方はもちろん利用できます。もし、京都で適当な宿が思いつかない方はぜひ利用されたらよいと思います。まだ、新しく、ちよつといいかもしれません。

そして、妙心寺では、一般の観光客の方々に混じり、法堂の天井に描いてある龍の絵を見ました。今から四百年ほど前に、狩野探幽（かのうたんゆう）に描かれたもので、「天井画雲龍図」といいます。この龍の絵は、圓福寺の玄関のついたて、妙心寺のポスターにもよく使われます。なにより、住職の手



龍は架空の生き物とはいえ、天井の龍はとても立体的で、今にも飛び出してくるようでした。目玉がどの位置から見ても中心に見えるように描かれていたという説明も、なるほどそうでした。また、龍のバックの渦のような雲が、未知なる龍をより引き立て、その当時として、自然や神仏に対する人々の畏敬の念さえ感じ取ることができました。

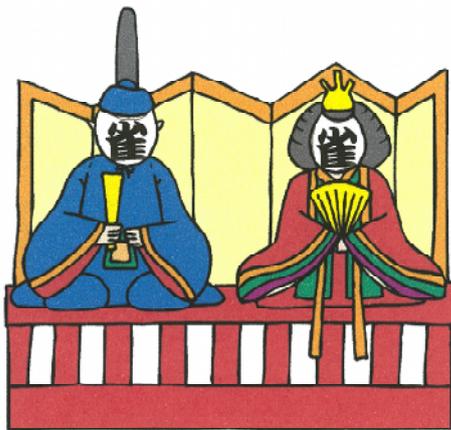
ぬぐいによりントされて、十三年も洗濯をしていくわけですが、とても見慣れていたのですが、いざ本物との対面となると、心から奮立つような感動を味わうことができました。

大方丈には、全国の妙心寺派のお寺の名前が書いてある札が掲げてあり、沢山ある中から「圓福寺」の札を見つけました。そして、住職の実家である岩手の霊桃寺の札等々を探してみても、本山にきていることを改めて感じました。

圓福寺の花園会の人々が研修をしている間、錦の市場から安いバック旅行のホテルまで、そぞろ歩いて見ました。京都の町並みは整っていて、方向音痴の私も、迷子にならずに歩くことができます。ほど、整っていてきれいでした。外から見られることを意識し、どの建物・家にも、京のみやびな精神や歴史が受け継がれている気がしました。そのせいも、飛んでるスズメでさえ、

由緒正しい鳥に見えてきました。

最後に、感想を一言で言わせてもらえば、「また行きたいな！」です。



タイムトラベル

千城台南中二年 川口 育海 なるみ

千葉市では、国語教育の一環として、小中学生が書いた作文をまとめた「ともしび」という文集を作成しています。発刊以来、この文集に作文が掲載されることは、親子ともども名誉なこととされています。

ここに、檀家さんのお子さんが書いて「ともしび」に掲載された作文をご紹介します。

おじいさんを亡くされてから、毎年お正月を京都の妙心寺で過ごすことにしているお家で、妙心寺に行つての経験作文にされています。独特の視点で、おじいさんへの感謝や、自分を見つめる姿などが書かれている秀逸な作文だと思います。

為 祖父 陽原貴昌信士菩提
為 祖母 昌節靖苑信女菩提

見たことのないような太い筆を持ち、頭の中にはさまざまな言葉が浮かんでいた。「よし。海にしよう。」祖母に教えられたように筆をかまえ大きな和紙に向かつて思い切り体ごと集中して「海」という字を書いた。「勢いがあつてかっこいい字が書いている。」こんなに大きな紙に書いたことはなかったのだ、とても気持ち良く書けた。天井を見ると、僕のことをどこまでも追いかけてくる雲龍図がある。僕は一三三七年にタイムスリップした。

祖父がここに連れてきてくれたが、祖父はここにはいない。大きな本堂は足音もせず静まり返っていた。本堂の真ん中に座り手を合わせる。ここは昔お花



畑があつて、四季折々に美しい花が咲き乱れ、いつしか花園と呼ばれるようになった。この地をこよなく愛し、常に世の中の平和を願っていた、第九十五代花園天皇により、妙心寺が禅寺としてここ開山されたようだ。

禅と聞くと、厳しい修行を思い浮かべる。外は雪が降っているが、お寺の人たちは、裸足で忙しそうに歩いている。もちろん

ん髪の毛を剃っているの、見るからに寒そうである。しかし、それにも理由がありそうだ。

今から二千五百年も前のインドでは、丸坊主はとても恥ずかしいことで、苦行の一つだったらしい。お釈迦様は皆が幸せに暮らすためにはどうしたらよいかと考えるために修行をしたそう。現代のお寺の人たちもお釈迦様のようになりたいと、寒くても丸坊主で修行をしている。二千五百年前の髪型が今でも大切にされていることにとっても驚いた。

そのほかにも、お釈迦様は坐禅によって悟りを開いたことから仏教では、坐禅が大切にされている。十二月一日から一週間坐禅をし、悟



りを開いたとされていることから、今でも十二月一日から八日早朝にかけて行われている。その期間は横になって寝ることは許されず、とても厳しいものであるそう。

日本にはどれくらい神社や寺院があるかご存じだろうか。神社の数が八百、寺院がおよそ千七百もあるそう。その、一つ一つの寺院にも、今でも大切に守られていることや、続けられていることなど、いろいろな物語があるのだろう。歴史といっしょにさまざまな時代へタイムトラベルできたらどれだけ楽しいだろう。

京都は、竹林の道や、枯山水、紅葉、苔など四季を通して自然を楽しめるように工夫して作られている。その中でも枯山水は、川や、池などの水を使わず、石組みを中心に構成された、日本庭園の一つで、あの世とこの世をつなぐ庭ともいわれ

ている。石屋、砂の配置や組み合わせによって、心を落ち着かせる空間を作っている。

さて、僕もお寺の縁側に座り、枯山水を眺めてみることにしよう。僕には難しいことはわからないが、まるで、この空間にたった一人で居るような気持になった。波のような流れる石を夢中で追ってしまふ。たしかにあの世とつながっているかもしれないと考えたら見た景色はどのように見えるだろう。

いろいろな場所から見ると、石の世界が変わり、全く違う景色が広がる。雪が積もっている





も祖父が、僕の世話をしてくれていた。僕が幼い頃、春になるときれいな花が咲くように種をまいてくれたり、庭のお世話をしてくれたり

のも冬ならではの特別な季節感を感じることが出来た。どこからか、お経を唱える声が聞こえてきた。寒い本堂の中でも、お経を唱えていた。これも、何百年も前からこうして、この場所で毎日続けられていることなのだろう。

タイムトラベルでは、何百年も、何千年も昔の世界を見てきた。今も昔もつながっていることは、自然を愛すること。毎日正しく生活すること。一つのことにしっかりと向き合うということがわかったが、僕には何一つ出来ていない。

祖父と一緒に居ると、なんでも祖父が、僕の世話をしてくれていた。僕が幼い頃、春になるときれいな花が咲くように種をまいてくれたり、庭のお世話をしてくれたり

していた。嫌なことがあると、すぐに祖父に頼り、自分で解決することなどなかった。いつでも僕の味方、楽しく笑ってくれた祖母と、二人とも僕を置いて、今頃タイムトラベルを楽しんでいる頃だろう。

そして、僕が一人でも立派なおとなになるために、このタイムトラベルに出かけるきっかけを作ってくれたのだろう。そして未来の僕を見てほしい。次はどこへタイムトラベルに出かけよう。次は、どんな楽しい世界を見ることが出来るかな。

【和尚さんからナル君へ】
日本の神社の数は八万以上、お寺は七万七千、千葉県だけでも神社もお寺も三千以上あります。ちなみに、全国のコンビニの数は五万五千店だそうです。



坐禅会

住職入寺以来三十五年続いている木曜の坐禅会。火事で本堂がない間も、市原別院で継続しておりました。

週一坐って、体と呼吸と心を調べてみませんか。未経験者・初心者でも、懇切にご指導いたしますので、お気軽においでください。

【日時】

毎週木曜日

午後六時～七時

～七時半

坐禅
茶話会

(初めての時のみ、座り方や所作をご指導いたしますので、十五分前までにお越しください。)

【会費】

特になし

【その他】

服装自由

(できるだけ楽

な服装)



僧堂で何してる？ 修行道場の生活

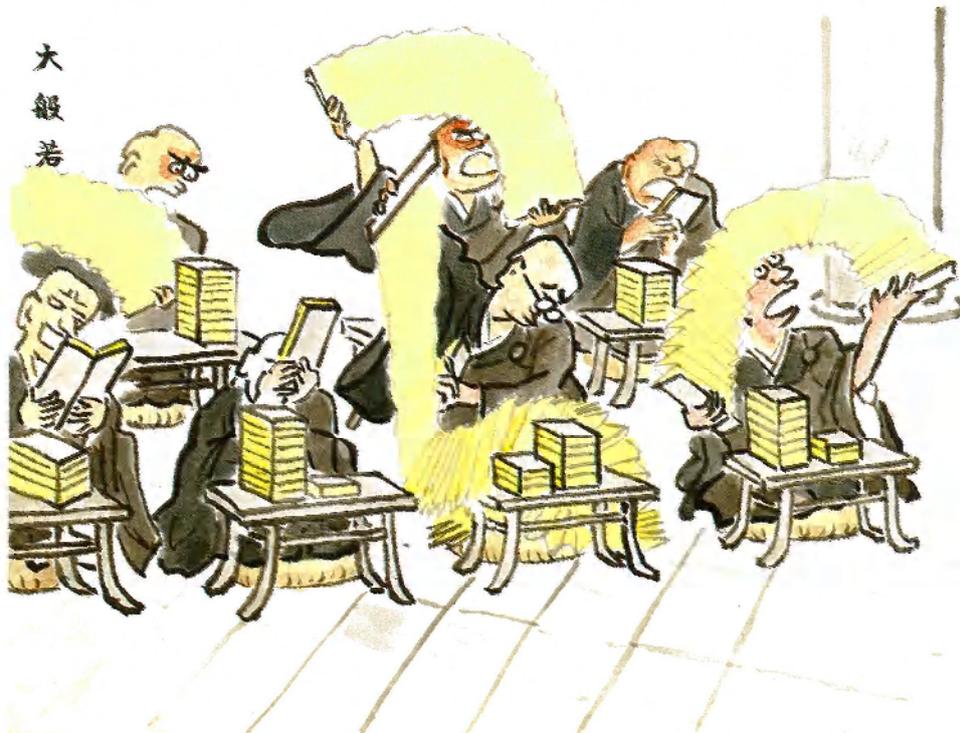
その十一

大般若祈祷

正月三が日の修正会でご祈祷させていただいた般若札を、檀信徒の皆さんにお届けしておりますが、正式には六百巻の大般若経を転読してご祈祷をいたします。

一卷ごとに、その訳者である三蔵法師のお名前を大声でお唱えするのです。三蔵法師、言うまでもなく西遊記の主人公で、そのお名前を唱えるたびにどことなく親しみを覚えたものです。

一卷ごとの転読と云って、経巻をパラパラと繰るので、これにもコツがあって、慣れない雲水はパラパラではなくバラバラにしてしまい慌てるという光景がつきものでした。



大般若

修正会

大般若

新春の瑞気が立ちこめた本坊法堂に響く裂帛れつぱくの音声おんこゝろ。これは今、修正しゆじゆ祈祷の大般若転読の真最中のところ。本尊真前に並べられた円座に坐を組み、配分された六百巻の幾巻かを各自に受け持った一山の老僧、若和尚、雲水たちは、大音声に、「大般若波羅蜜多経巻第〇〇大唐三蔵法師玄奘奉詔訳！」と叫んでは繰り、「降伏一切大魔最勝成就！」と叫んでは繰り終わって、つぎつぎと経巻の黄色の弧を空中に翔けめぐらす。まったく心魂のほとばしる熾烈な祈りの情景。

修正しゆじゆ会かいは前年のいろいろな過ちを懺悔修正する法要というが、不完全な自己を反省懺悔するところに、求道心も起こり祈願も生まれる。正月三日間の修正会に「一切皆空」の悟りを説いた大般若経を転読することは、単なる現世利益を念ずるだけでない。すべての人が行ないを修めるに慶びあれ、道に進むに障りなかれ、菩提心に怠りなかれ、と心のたたずまいを正しく修めることで、他に願う外的助力より、わが情志、願望の現われを眼目にすべきだ。

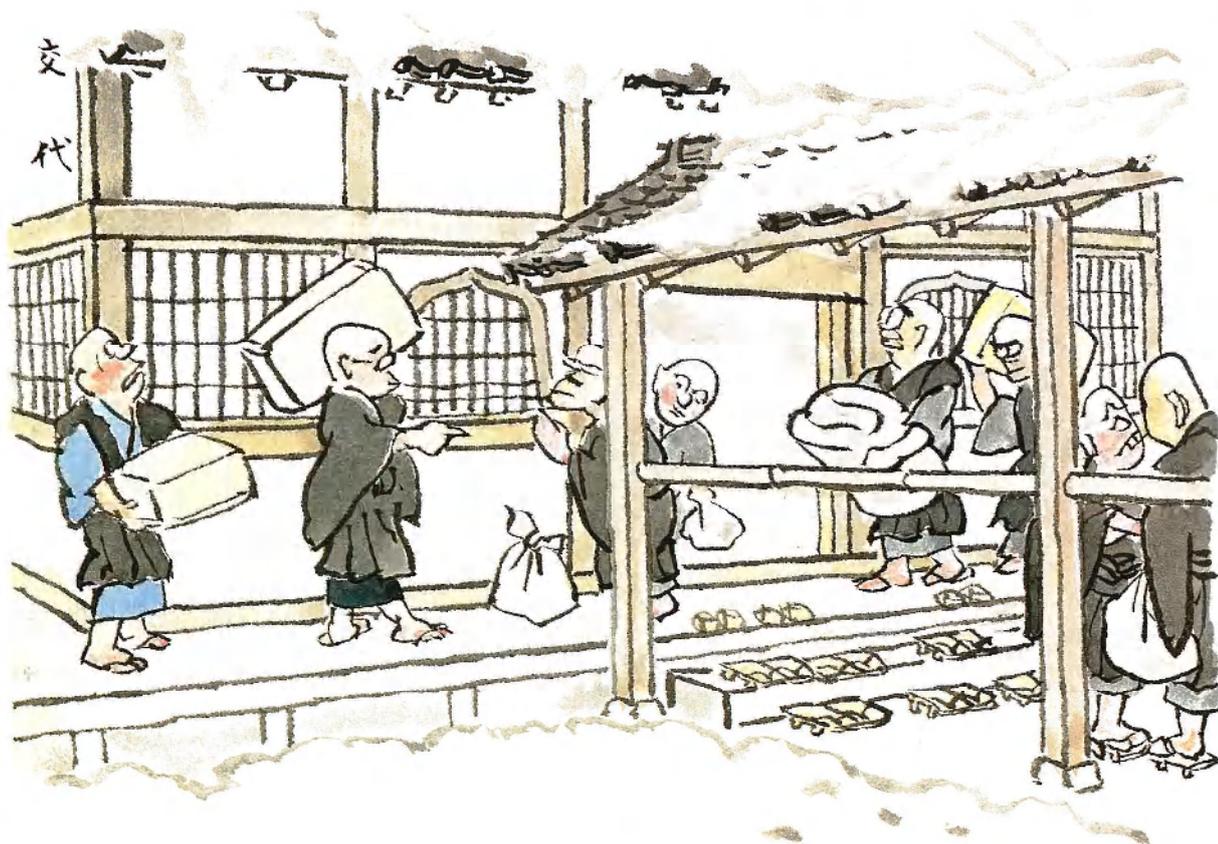
交代

人事移動

講了の一夜が明けて二月二日、雪安居解制の当日。粥後早々、杯三通の合図で諸役位が交代する。前夜の解制総茶礼で新役の顔振れはすでに発表済みだ。新しく寮舎に入る者、堂内に帰る者、引越し、引継ぎにひとしきり交代騒ぎを演じ、そのあとは隠寮で新旧両役の茶礼である。

もつとも引越し荷物といったところで、雲水はごくわずかの身のまわり品と袱子行李がすべて。人間の所有欲を制する建前から、もともと彼等の持ち物は極端に制限されているのだ。

新メンバーによって来夏の半年がまた円滑に維持されてゆくだろう。堂内衆は修行三昧に打ちこめばよいが、常住員は自分の修行はもちろんだ、日常万端事を受け持って、団体生活に支障のないよう勤めなくてはならぬ。自己に優先して道友のためにつくそうというのは、やはり久参の者である。新到には、まだ重要なポストを与えられる力量はないが、やがて追いつくと寮舎に入り、古参連の指導を受けることになる。



「堂内」と「常住」

交代は、前日に来期の配役が発表されます。今期、禅堂で起居する「堂内」だった者が、僧堂の運営側の「常住」に移動となれば、仕事ができる雲水だとの評価を受けたという暗黙の認識がありました。

一方、また来期も「堂内」となった雲水は、もう少し修行をしると言われているのと同様で、少しかかりする気持ちを抱いてしまいません。そこで、また堂内だから、運営側の苦勞をしなくて、樂ができると負け惜しみの言葉を言うことになりません。しかし、雲水の少ない現在の僧堂では、全員が常住という感じのようです。

令和四年行事予定

5月	4月	3月	2月	1月
日	8日	17日～23日	日～日	1日～3日
第〇〇回 花園会ゴルフ大会	降誕会(花まつり)	春彼岸 春彼岸法要は、コロナ対策のため塔婆供養のみとさせていただきます。あらためてご案内を差し上げます。	主巡田 四国あるき遍路の旅 お釈迦様のお亡くなりになった日。涅槃図の掛け軸を掛けて法要をします。	新年修正会 花園会新年会 仏教興隆・国家安泰・五穀豊穣・檀信徒各家の繁栄などを祈禱する法要をしています。この修正会で祈禱した「般若札」は、寺報・カレンダーなどと一緒に、みなさまにお届けいたします。

10月	8月	7月
日	27日	10日
第〇〇回 花園会ゴルフ大会 禅宗初祖「達磨大師」のご命日。	地藏盆 子どもたちの楽しいお盆の行事です。夜店や野点・ゲーム大会などで盛り上がる夜祭りです。併せて、地藏盆の法要で水子・ペット・人形供養も行います。	初盆施餓鬼会 山門施餓鬼会 初盆を迎える仏様のご家族の参拝のみとさせていただきます。それ以外の方は塔婆供養とさせていただきます。あらためてご案内を差し上げます。
5日	9日～16日	12日～16日
達磨忌	八月盆の棚経 八月盆の初盆をお迎えのお宅に棚経にお伺い致します。	七月盆の棚経 七月盆の初盆をお迎えのお宅に棚経にお伺い致します。
		23日～24日
		圓福寺寺子屋「禅童会」 一泊二日の子どもたちの坐禅会です。坐禅だけでなく、楽しいゲームやいろいろな体験もできます。たくさんさんの参加を待っています。



「捨雪」平林寺 放生齋糸原圓應老師

12月	11月	10月
31日	18日～20日	23日
歳末ボランテラ 花園会忘年会 年越しまいり あまざけ・般若湯・年越しそば・福だるま・お守り・新春祈禱など、たくさんお参り下さい。	三巡目の第九回 四国あるき遍路の旅 成道会 お釈迦様がお悟りを開かれた日です。	涅槃精舎毎歳法要 布薩会 永代供養の方々の法要と、生前戒名の授戒会。
17日	8日	23日
		土曜会「涅槃寄席」
		市原別院収穫祭

「心のもつたご法事をおつとめする四条件」

「ご法事に心をこめるにはどうしたらいいですか？」



「第一に、今日ご供養する故人をしつかり
と思い出すことです。」

なぜ思い出すのか？ それは故人をあな
たのそばにお呼びすることになるからです。
お釈迦さまがお亡くなりになるとき、お
弟子の一人がお釈迦さまに泣きながらたず
ねました。

『お釈迦さま、お釈迦さまがお亡くなりにな
ったら、私たちはどのように生きていけ
ばよいのでしょうか。もうお会いすることは
できないのですね』

するとお釈迦さまがおっしゃいました。
『泣くことではない。私はいつでもお前たち
とともにいる。私のことを思い出してくれ
れば、私はすぐお前たちのところへ行く。
私といっしょにいたければ、私のことを思

い出さない！』

今日のご法事でも同じです。故人をしつ
かりと思い出してください。声が聞こえま
すね。お顔が見えますね。故人があなた
のすぐそばにおいでになったのです。

第二に作法を正確に行うことです。

作法は心の表現です。いいかげんな作法
ですませるということは、心がこもってい
ない証あかしです。静かに両手を合わせて、美し
い合掌をいたしましょう。故人を思い出し
て、語りかけながら行くと心がこもります。

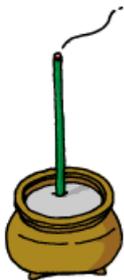
第三には、故人を語ることです。

故人がお元気であったころの人柄をみな
さんで語り合い、「いい人だったなあ」と
なつかしむことです。また、「大変お世話
になったなあ」と感謝の思いをお互いに述
べ合うことも大切です。

故人ならこう言うだろうと
か、怒るだろう、笑うだろ
う、あるいはどんな行動をす
るだろうとお参りに集まった
人同士語り合うことも大切な
ことです。それは必ず日々の
生活に役立っていくに違いあ
りません。

第四には、故人に喜んでも
らえるような日々を送ること
を、お誓いすることです。

そしてその日から実践する
ことです。次のご法事の時に
よいご報告ができるように
日々努めてまいりましょう。



(6月の「園だより」から)

アリとギリギリリス



サツマイモの植付を予定していた五月のQ園隊を中止に致しました。そうはいつでも、子どもたちが楽しみにしている秋のお芋ほりが中止になるわけではないので、畑は予定通りに耕して、職員が時間をやりくりしてサツマイモの植付をしました。

な〜んだ、Q園隊の手伝いがないくてもできるんじゃない・・・なんて言わないでください。親子で植付から体験することに、Q園隊の意義があるのですから。

トラクターで畑を耕しながら、「アリとギリギリリス」のお話を思い出しました。寒い冬が来るまでにアリさんは一生懸命働いて冬に

備えました。一方、ギリギリリスは冬がやってくるまで遊びほうけて過ごしました。寒い冬を迎えて、食べるものに事欠いたギリギリリスにアリさんが食べ物を分けてあげたのか、あるいはギリギリリスが飢え死にするのかどうだったかは思いつきませんが、優しいアリさんであってほしいと思うのは私がお坊さんだからでしょうか。

寒い冬に限らず、台風が来たり、地震が来るかもしれない、今のような感染症が蔓延することもあるかもしれないし、私たちの未来は誰にも予測できません。

「この秋は雨が嵐かしらねども今日のとつとめの田草取るなり」といふことばを思い出しました。収穫の秋に長雨になったり台

風が来たりするかもと予測できない先のことを気に病んだりしないで、今日やるべきこと、今やるべきことをやることじゃないか、と。

この言葉は、楽観的な将来に対しての戒めにもなります。

少子化で、将来大学に行こうと思ったら、誰でも大学に行ける時代になるといわれています。だったら勉強なんかしなくてもいいじゃないかと、ギリギリリスの考えも起きるかもしれません。でも、今日のとつとめの田草取るなりで、子どもにしかできない勉強や遊び、体験などをたくさんやるということが予測不能な未来に備えることにつながるはずですよ。

一人で畑仕事をしている私の体力は、ギリギリリス。早くQ園隊を再開できないかな



令和4年年回表

百回忌	五十回忌	三十三回忌	二十七回忌	二十三回忌	十七回忌	十三回忌	七回忌	三回忌	一周忌	回忌
大正十二年	昭和四十八年	平成二年	平成八年	平成十二年	平成十八年	平成二十二年	平成二十八年	令和二年	令和三年	亡くなった年

法要の会場として、どなたでも本堂がご使用できます。お参りの方はすべて椅子席ですので、ご安心下さい。また、法要後のお膳のご用意もできますので、お気軽にご相談ください。

写経会

般若心経を写経いたします。大きめな字でお手本が印刷された、とても書きやすい写経用紙を使用しています。お道具の準備から毛筆の基礎なども親切にご指導いたします。

【前期期日】

- 二月六日
- 三月六日
- 四月三日
- 五月十五日
- 六月五日

【後期期日】

- 七月三日
- 八月七日
- 九月四日
- 十月二日
- 十一月六日

【時間】

午前十時～十二時

【会費】

一期五回で、花園会員三千円
会員外 五千円

【講師】

齊藤 加代子先生・住職

【用意するもの】

小筆、硯、墨、半紙

【定員】

二十名

【申込】

お寺までご連絡ください。



日曜会

日曜朝の勤行と坐禅、そして少しの庭掃除。一週間の始まりをお寺ですタートさせてみませんか？

【日時】

毎週日曜日

- 午前六時～六時四十分 勤行
- ～七時 坐禅
- ～七時半 随意坐
- ～八時 庭掃除

【会費】

特になし

【その他】

服装自由
申し込み不要



茶禅会

休会中

土曜会